九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

物質に宿る記憶 : リヒャルト・ゼーモンの「ムネーメ」研究のために

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/4736683

出版情報：言語文化論究. 47, pp.47-50, 2021-10-31. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

物質に宿る記憶
――リヒャルト・ゼーモンの「ムネーメ」研究のために――

福　元　圭　太

1．はじめに

物質には記憶が宿る、有機物質である生体にはエングラム（Engramm）という記憶の残存痕跡があり、その総体をムネーメ（Mneme）という――1904年にこのような主張を展開したのがリヒャルト・ゼーモン（Richard Semon: 1859-1918）である。

記憶を通して習慣や言語そのもの、また美術・音楽等の文化全般は、情報の体系として次世代へ受け継がれていく。この遺伝子によらない「文化伝達の単位」を初めて仮定し、「遺伝子 gene」と韻を踏ませて「ミーム meme」と命名したのは、『利己的な遺伝子』で有名なリチャード・ドーキンスであると言われているが、ミーム理論の先駆者は実際には「ムネーメ理論」を提唱したリヒャルト・ゼーモンであると言ってさしつかえない。

著者がこれから展開しようとしている研究は、その文化史的・思想史的な重要性にもかかわらず、ドイツにおいてさえほとんど忘れられ、ましてや本邦においては最近までまったくと言っていいほど知られていなかった[1]ゼーモンの「ムネーメ理論」の解明を目指す。またベルクソンの『物質と記憶』と「ムネーメ」との間に関連があるのかどうか、さらにアビ・ヴァールブルクの「ムネモシュネ」の議論に「ムネーメ理論」が与えたインパクトの射程を測ることも視野に入れる。

2．ミームとムネーメ

ドーキンスが1976年に著作『利己的な遺伝子』で提案した「ミーム」は、「文化的情報の伝達単位」を意味する。「ミーム」は、生命情報の単位である遺伝子からのアナロジーで仮想されたものであるが、このミーム概念によって我々は、文化システムを生命システムになぞらえて記述する視点を得た。人間存在はすなわち、「遺伝子 gene」と「ミーム meme」という二つの情報系の複合体と捉えられるのである。ドーキンスが「あらゆる生き物は遺伝子の乗り物である」と喝破したことはつとに知られているが、文化を持ち、それを伝承する人間は、正確に言えば、遺伝子に加えてミームという「文化の複製子」の乗り物としても機能していることになる。

1865年の「メンデルの法則」を嚆矢とする遺伝子研究は、ワトソンとクリックによる1953年のDNA二重らせん構造モデルの提示によって、飛躍的に前進した。一方ミームについても1976年以来、種々な定義や議論がなされてきた。

例えば佐倉統は、文化情報の伝播と交換は「人間の脳における記憶物質」、すなわちミームを媒介として行われるとし[2]、その起源は数万年前に遡ると言う。多数の人間の脳を集合的に考えた場合、

文化的情報全体が「プール」ないし「培地」となって、ミームは伝承され、増殖する。佐倉は文字の発明を脳の外部記憶装置（外付けハード）の出現になぞらえ、書籍や図書館はそれが巨大化したものと捉えている。さらにインターネットは図書館機能の爆発的な容量拡大であると述べる[3]。

欧米でもすでに「ミーム学」が確立され、ダニエル・デネット（『心の進化を解明する バクテリアからバッハへ』、リチャード・ブロディ（『ミーム ── 心を操るウイルス』）スーザン・ブラックモア（『ミーム・マシーンとしての私』）らがミームを生物学的・心理学的・哲学的に考察している

しかしながらドーキンスがミーム論を提唱する70年以上前の1904年にリヒャルト・ゼーモンが打ち出した「ムネーメ理論」については、「ミーム学」の中でもほとんど言及されることがなく、したがってそれがどういう概念であるのかも究明されていない。またゼーモンその人も、ドイツにおいてはすでに「忘れ去られた科学者」であり、本邦においてはその名前すらほとんど知られていない。しかしながら「ムネーメ理論」の先見性と革新性は、是非とも解明され、再評価される必要があると思われるのである。

３．問いと方法

そこで本研究は、「忘れ去られた科学者」リヒャルト・ゼーモンに焦点を合わせ、以下の核心となる「問い」を立て、その解明を目指す。

１．リヒャルト・ゼーモンとはどのような知的経歴を持ち、どのような業績のある科学者で、どのような思想を有していたのか。これを解明するには、リヒャルト・ゼーモンの生涯、学問的・知的経歴、著作、同時代の影響関係、活動領域、その他の関連事項に関する徹底的な調査が必要である。著者はドイツの主としてイエーナで、この調査を実施することを計画していたが、新型コロナウイルスの爆発的な感染拡大により、未だに渡独できずにいる。今のところ数少ない文献による調査を継続している。

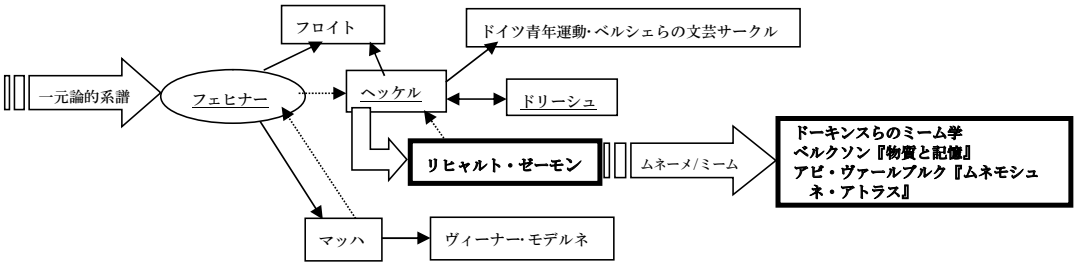
２．ドーキンスの「ミーム」に70年以上先行し、ドーキンスに何らかの影響を与えたはず（『利己的な遺伝子』ではゼーモンへの言及はない）の「ムネーメ理論」とは、そもそもどのようなものであるのか。これを解明するには、ゼーモンが「ムネーメ」を打ち出した1904年の著作『有機的事象の変遷にも関わらず保存原理として作用するムネーメ』（*Mneme* als erhaltendes Prinzip im Wechsel des organischen Geschehens.）を精読し、「ムネーメ」概念を浮き彫りにすることが必要になる。これについては、注１に挙げた本書の一部翻訳を参照し、必要であればそれを補足することになる。

３．思想史・精神史の中で「ムネーメ」理論がどのような経緯で生まれ、どのような位置にあり、さらに人文科学の領域で後世にどのような影響を与えたのか。つまり、「ムネーメ理論」の意義を人文科学の思想史・精神史の中に定位するため、ゼーモンに先行するベルクソンの『物質と記憶』（1896年）と「ムネーメ理論」との関連を分析する予定である。ただし直接の影響関係はないのではないか、という予想はある。またゼーモンへの言及があるエルンスト・ヘッケルの最晩年の著作『結晶の魂』（*Kristallseelen.* 1917.）並びにゼーモンの上記の本を実際に読んだことが分かっているアビ・ヴァールブルクの一連の著作、および晩年の大規模な図像アトラス「ムネモシュネ」（いわゆる『ムネモシュネ・アトラス』（1920年代後半））との関連を分析する。

アビ・ヴァールブルクへの影響をトレースすることに如実に現れているように、本研究は思想史・精神史、なかんずく哲学・芸術史・アルヒーフ（アーカイブ）学等、人文科学の領域における「物質と記憶」の問題を、極言すれば「物質としての身体と心」の問題を考察しようとするものである。

著者は2020年10月に、物理学者フェヒナー、進化生物学者ヘッケル、そして発生生物学者ドリーシュという、実証主義的自然科学者としての出自を持つ３名が、「ネオ・ロマン主義的自然哲学者」へと変貌していく消息を追った著書[4]を上梓した。自然科学は、ガリレオ・ガリレイに端を発する世界の数学的・数量的把握へと帰着する。フェヒナー、ヘッケル、ドリーシュはしかし、この数学的自然科学から出発しながら、世界の質を問う自然哲学へと移行した。フェヒナーは「植物の魂」の生活を語り、精神物理学から「物質に宿る魂」を導出、魂の存在とその不死を説く。ヘッケルはダーウィンの進化論を奉じ、キリスト教の神を廃したのちに、自然即神という一元論的宗教へ移行した。ドリーシュは、機械論の圧倒的優位の中で、ほとんど廃絶されていた生気論を復活させようとした。本研究の趣旨は、ゼーモンもまた上記３名の流れを汲む「ネオ・ロマン主義的自然哲学者」ではないかという仮説に基づき、新たな「境界越境者」としてのゼーモンを精神史の中に定位して、その評価を目指すものである。

これまでの著者の研究と本研究の関係を図にしておく。太線で囲った部分が今回の研究範囲である。



４．研究動向

最後に、ゼーモンに関する研究動向について覚書を記す。ゼーモンに関するドイツ語圏の博士論文は、管見の限り1968年にチューリヒ大学に提出された Jürg Schatzmann の『リヒャルト・ゼーモンとそのムネーメ理論』*Richard Semon und seine Mnemetheorie.* のみである。また英語圏では Daniel Schacter の注目すべきモノグラフィー *Forgotten Ideas, Neglected Pioneers: Richard Semon and the Story of Memory.*（Psychology Press, Philadelphia 2001）がある。この本のタイトル『忘れられた着想、無視された先駆者』が、いみじくもゼーモンの位置を如実に物語っているであろう。また、古くはチューリヒの心理学者オイゲン・ブロイラー（Eugen Bleuler 1857-1939：「精神分裂症」── 現在の名称は「統合失調症」── という概念の発案者）が、「機械論・生気論・ムネーメ論」という重要な論文を書いているが、これも今日ではほとんど言及されることがない。

本邦においては東海大学の佐藤恵子が2015年にヘッケルに関する著作『ヘッケルと進化の夢 ── 一元論、エコロジー、系統樹』（工作舎）を上梓し、ゼーモンに触れている。また先述のように、2020年秋に岩波書店からゼーモンの著書の一部翻訳が刊行された。

注

1　研究の開始段階では、管見の限りゼーモン研究は皆無に等しかったが、2020年10月17日に岩波書店から＜名著精選　心の謎から心の科学へ＞の中の１冊として、『無意識と記憶 ゼーモン / ゴールトン / シャクター』が刊行され、本研究で著者が解明しようとしていたゼーモンの著書 *Mneme* als erhaltendes Prinzip im Wechsel des organischen Geschehens. 1904. の一部が翻訳・紹介された。それ自体まことに有意義なことであるが、本邦におけるゼーモン研究の端緒を開こうと準備を進めていたので、忸怩たるものがある。

2　佐倉統『遺伝子 VS ミーム』廣済堂ライブラリー2001年、29頁。

3　同上書、30頁参照。

4　福元圭太：『賦霊の自然哲学　フェヒナー、ヘッケル、ドリーシュ』九州大学出版会、2020年。